

南西諸島のイボイボのイモリ

南西諸島を初めて訪れたのは、中学3年生の時でした。

その頃は昆虫採集に夢中で、南西諸島通いは大学4年まで続きました。特に大学生のころは、冬から初夏までアルバイトでお金を貯め、夏休期間中の大半を沖縄で過ごし、せっせと捕虫網を振っていました。

社会人になると対象が東南アジアなどの海外に移ったものの、昆虫を追いかける毎日が続きましたが、結婚し子供が出来るとそんなことばかりしているわけにはいきません。

そこで昆虫採集の合間に観察も行っていた、有尾類を中心とした両生類や爬虫類の観察を行うことにしました。

小型サンショウウオの仲間やアカハライモリを観察する中で、南方志向の強い私は、どうしても奄美諸島や沖縄諸島の一部に生息するイボイボのイモリを観察したいと考えるようになりました。

南西諸島病が再発し、奄美・沖縄通いの再開です。

イボイモリは、鹿児島県奄美諸島の奄美大島、請島、徳之島の3島にアマミイボイモリが、沖縄県沖縄諸島の沖縄島、瀬底島、渡嘉敷島にオキナワイボイモリが生息し、両県の天然記念物に指定されるとともに、種の保存法の国内希少野生動植物種に指定されています。

種 名	分 布	
アマミイボイモリ <i>Echinotriton raffaellii</i>	鹿児島県	・奄美大島 ・請島 ・徳之島
オキナワイボイモリ <i>Echinotriton andersoni</i>	沖縄県	・沖縄島 (沖縄市やうるま市以北の市町村、玉城村、知念村) ・瀬底島 ・渡嘉敷島

RLカテゴリー			法適用	
環境省	沖縄県	鹿児島県	種の保存法	天然記念物
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	国内希少野生動植物種	沖縄県 鹿児島県

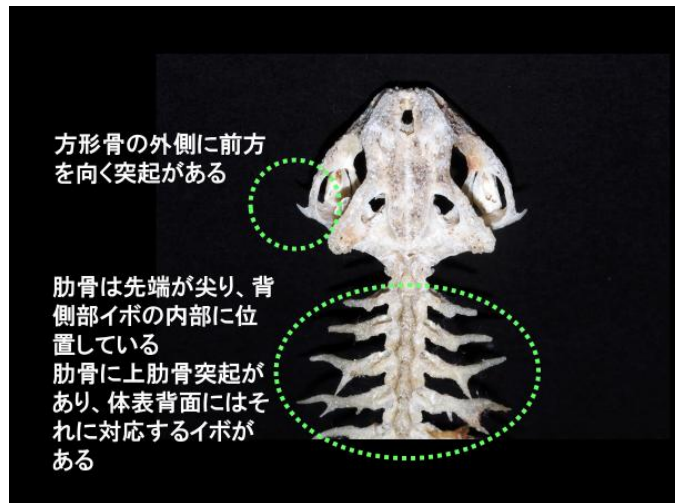
イボイモリの形態的な特徴は、色々有るのですが、何と言っても肋骨が発達し、その周辺先端は体側に突出して疣状になることで、和名のイボはこの形態的な特徴から付けられています。

また頭部が扁平で大きく、頭長と頭幅がほぼ等しいため菱形をしているのも特徴の一つです。

生態的な特徴は主に繁殖行動にあり、イモリ科の中でも極めて特異で、変態・上陸後はほとんど水中に入ることではなく、精子の授受や産卵も陸上で行われます。

人に生息場所などの詳細な情報を聞いたり案内してもらったりするのは性に合いません。偶然林道などに出てきた個体を見つけるのも何だかいいやだ。

そこで、日本両生類研究会の会誌に掲載された宇都宮妙子先生の調査記や沖縄両生爬虫類研究会の会誌AKAMATA等を読んだり、地形図と植生を重ねたりしてポイントを絞り、現地に乗り込むのですが敗北の日々が続きました。



イボイモリの頭骨と肋骨



沖縄北部(新川川支流)産のイボイモリとシリケンイモリ



初めてイボイモリを観察することができたのは、南西諸島通いを再開して5度目の山原でした。その後は経験を積み、毎回コンスタントに10～20個体は観察できるようになりました。

私の独断と偏見による、両種の各産地・個体群毎の特徴を紹介します。

沖縄島北部(山原)

一般的に沖縄北部の個体群は、大きくて体色は黒褐色の個体が多いのです。

沖縄北部は生息地も広く、個体数も多いため、最も安定した個体群だと思われます。



沖縄北部(与那川水系等)産のイボイモリと生息環境

ただし、水系ごとに違いがあり、新川川支流域では、体色が赤褐色の個体が多い個体が多く、山原でも南に位置する名護岳周辺は、中部産に近い個体が多いなどの変異があります。



沖縄北部(新川川水系)産のイボイモリと生息環境



名護岳(羽地大川水系)産のイボイモリ

沖縄島中部

沖縄中部の個体群は、開発により生息地が分断・孤立化していますが、それぞれの生息地の生息密度は高いように思われます。

一般的に沖縄北部の個体群より小型で体色は黒褐色の個体を多く見かけます。



沖縄中部(天願川水系)産のイボイモリ成体・幼生と生息環境

沖縄島での繁殖環境は、止水環境が少ないこともあると思いますが、一般的に緩やかな細流の淀みで繁殖している場合が多いです。

瀬底島

瀬底島の個体群は、1990 年頃までは多産しており、1989 年の田中聡先生による調査(瀬底島におけるイボイモリとシリケンイモリの生態についての予備的観察)では、繁殖池に集まる雄 15 個体、雌 237 個体が確認されています。

筆者が 2002 年に確認した複数の個体は、おそらくその一連の調査により指切りによるマーキングが行われたと思われる個体でした。

その後、数個体を確認していますが、現在では生息環境の悪化などにより、個体数が激減していると思われ、瀬底島を訪れても観察できる機会は少なくなっていました。



瀬底島産のイボイモリ(指切りマークが行われた個体)と生息環境

渡嘉敷島

渡嘉敷島の個体群は、遺伝子的には沖縄島南部の個体群に近いことが分かっています。

今まで確認された個体数は少ないのですが、その主な要因は、分布中心域の水場近くを通る林道が少ないことにあります。

私も偶然林道に出てきた個体やリ形側溝に落ちた個体を観察したことがあるのですが、大きく肋骨が発達した個体です。

私の知る限り、一番かっこいいイボイモリです。



渡嘉敷島産のイボイモリ

奄美諸島のアマミイボイモリは、頭幅が広く、肋骨の発達が良く、前後の肢の掌、総排泄孔周辺、尾の下面、疣状の突起先端部が黄褐色～赤褐色となる個体が多く、イボイモリらしい形態です。

徳之島

徳之島の個体群は、頭幅が広く、肋骨の発達が良いのですが、沖縄諸島や奄美大島のイボイモリよりも小さな個体が多いです。

徳之島は、個体数が多い島として知られていますが、ダム建設や農地転換(水田の減少)などの開発により、生息地の縮小や消失が進みつつあります。

しかし競合するシリケンイモリが生息していないためなのか、それぞれの生息地における生息密度は高いと思われます。



徳之島産のイボイモリ 成体と幼生

奄美大島

奄美大島は、確認記録が少ないため個体数が少ない島とされていますが、必ずしもそうではありません。

奄美大島や徳之島の個体群は、沖縄島と違い一般的に止水環境で繁殖している場合が多く、その様な環境の近くを探すと、観察することは難しくありません。

形態的には徳之島の個体群に近いのですが、徳之島の個体群より大型な個体が多く、お気に入りのイボイモリです。



奄美大島産のイボイモリと生息環境

今までの観察経験を基に、独断と偏見でだらだらと書きましたが、皆さんはもうお気づきでしょう。

何回か観察に訪れているものの、残念ながらいくつかの個体群は、まだ観察できていません。

なお、法適用で示したように、イボイモリは沖縄県と鹿児島県の天然記念物に指定されているとともに、平成 28 年には種の保存法の国内希少野生動植物種の指定を受けているため、捕獲は禁じられています。

老体を鞭打った観察は、まだまだ続く！ かな？